

資料室だより 148

(ヴリーゲン蔵書 8)

Heinrich Glarean : Dodecachordon I & II

Musicological studies and documents, 6 (American Institute of Musicology)

グラレアヌスは1488～1563年、つまり盛期ルネサンスを生きたスイスの音楽理論家です。このたびヴリーゲン蔵書としていただいた「ドデカコルドン」(12旋法論)は1547年に刊行されており、後世への影響という観点からも重要な理論書です。文章はすべて英訳になっておりますのでルネサンス音楽理論を勉強する際に参照なさることをお勧めします。

グレゴリオ聖歌は8つの教会旋法をベースにしていることはご存知と思いますが、hの音がbに変位することがしばしばあります。b音が入ることによって近代のDur-Mollシステムに近い旋律を生みます。長調短調に当たる旋法をエオリア、イオニア旋法として同等の地位を与えたのがグラレアヌスのドデカコルドンです。

ルネサンスの多声音楽は既存の旋律(グレゴリオ聖歌あるいは世俗歌曲、民謡など)の上にかに音を構築していくかという技術が作曲家の興味の中心になります。グラレアヌスはその旋律を作る人をフォナスクス *phonascus* いい、そのうえに音を構築していく人をシンフォネータ *symphoneta* と言い、旋律素材を作り出す人と区別しています。共通の素材から独自の音響空間を作り上げていく能力が作曲家の能力だったわけです。

ドデカコルドンは3部からなり、I巻には1部と2部本体が収められ、II巻は3部と引用譜例です。論述したことの例としてふんだんに楽曲を例に出してきていますが中途半端な引用ではなく完結していますのでこれで演奏を楽しむこともできます。例えば「オブレヒトによるエオリアン旋法の3声楽曲例」というような引用で実際に彼が論じたエオリア旋法とはどのようなものかを示します。ジョスカン、イザーク、オブレヒト、ラリーュー、オケゲムなどの同時代に作曲されている作品を緊密に検証しながら論を進めたと思われます。

(付記)

まだ目録にはしてありませんがヴリーゲン蔵書のなかには、オランダ語の古い宗教歌、またベルギーの近代、現代の作曲家のミサ曲、フランドルの民俗音楽関係の楽譜集、研究書もあり、ルネサンスフランドル楽派から現代まで、つまりご自分の足元のところまでの広い関心を伺わせます。ヴリーゲン氏の一つの世界を蔵書構成によって垣間見る思いです。

(杉本ゆり 記)